

2022年2月24日(木)

老球の細道657号

厳しい指導とは

会津バスケットボール協会 室井 富仁

コロナのみならずウクライナ情勢の緊迫化の中で北京冬季五輪が無事終了した。朝日新聞には今後の五輪の行く末を憂慮する4つの問題がピックアップされていた。①スノーボードハーフパイプに見られるような技の高難度化による刺激と安全の両立②フィギュアスケートのカミラ・ワリエワのドーピング問題による要保護者であればドーピング違反でも出場できるのか③アメリカで生まれながら中国に国籍を変更して出場した選手などに対するSNSでの中傷④人権問題などへの報道規制。

これらの問題に加えて最後に大きな話題となったのはドーピング問題のカミラ・ワリエワ選手のコーチであるエテリ・トウトベリゼの厳しい指導姿勢だった。

事の発端は、カミラ・ワリエワ選手がドーピング反応陽性の批判の中、女子シングルで転倒を繰り返して4位に終わった。演技を終えてうなだれるワリエワを、コーチのエテリ・トウトベリゼが慰めるのではなく、「なぜ、あきらめたの？」などと詰問する声がマイクで拾われたことであった。バツハ会長も「とても悲しい話題だ。苦しむ彼女を落ち着かせて助けるのではなく、周りは冷ややかに振舞っているように映った」と述べた。

コーチの詰問がまだわからない時、このシーンをテレビで見っていた私の家族は「あれだけドーピングで騒がれていたのだから転倒ミスもしかたがないよね。コーチも慰めているんだね」などと感想を言っていた。私は「そんなこと言っていないぞ。『何やってんだよ！今まで何やってきたんだよ！』と叱っているんだよ」と、私がコーチ時代に選手に浴びせた叱責をそのまま話した。そしたらその後の放送で、「氷の女王」と評されるカリスマコーチも同じようなことをワリエワ選手に言っていたことが判明した。実力世界NO1の選手が本番であれだけスッテンコロリを演じれば慰めの選択肢はなかったのではないだろうか。

「プレイヤーズ・ファースト」の昨今、とかく厳しいコーチングはパワーハラメントと紙一重であり、特に熱心に指導するコーチにとってはその配慮に迷い、悩むところである。

『嫌われる勇気』『幸せになる勇気』などの著書で自己啓発の重要性を論ずる哲学者の岸見一郎氏は日本スポーツ協会の公認指導者講習会で『スポーツにおける勇気づけ』という講演を行ったことがある。その際に「叱ることとパワハラとの線引きは難しいという指導者は多いが、端的に言えば、叱ることはすべてパワハラです。叱らなくても指導はできます」と話している。また、「ほめてはいけない。ほめるのではなく勇気づけをする」のだと。詳細は省略するが、現場は岸見先生の言うようにはなかなかいかないのが現実である。

できないことができるようになる、弱いチームが強くなるにはある程度の厳しさは必要である。できるまで続けさせる、細かいところを徹底させる等。問題は厳しさの中身とさじ加減、そして選手との信頼関係なのではないだろうか。そして決定的なのは、選手に厳しく接するコーチは我が身にも厳しく処することが鉄則であることは言うまでもない。